様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０３７０

研究課題名（和文）近世初期の和刻本と朝鮮版漢籍との関係についての研究

研究課題名（英文）Researches on the relationship between Chinese classical books printed in early modern Japan (Wakokubon) and the same kind of books printed in the Li dynasty (Chyosenbon)

研究代表者
長尾　直茂（NAGAO, Naoshige）

上智大学・文学部・教授

研究者番号：３０３２３１８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,000,000円、（間接経費）　900,000円

研究成果の概要（和文）：日本の近世初期に刊行された漢籍の和刻本の中から、『世説新語補』『剪燈新話』『古文真宝』を調査対象とし、その朝鮮本との比較対照を行った。『世説新語補』については、元禄７年刊行の和刻本と朝鮮本を比較対照した。『剪燈新話』については、朝鮮において注釈が施された『剪燈新話句解』と慶安元年刊の和刻本とを比較対照した。『古文真宝』については、日本で流行した諸儒箋解系統のテクストと朝鮮で流行した大全系のテクストを比較対照した。

研究成果の概要（英文）：Woodblock books of Chinese classics(Wakokubon) have been printed in early Japan. In those books, I focused on the book Sesetsu shingo ho, Sento shinwa, Kobun shinpo. As to Sesetsu shingo ho, I compared and contrasted the Wakokubon in 1694 with the same titled book printed in Li dynasty(Chyosenbon), About Sento shinwa, I compared and contrasted Wakokubon in 1648 with the annotated book, titled Sento shinwa kukai, printed in Li dynasty. About Kobun shinpo, I also compared and contrasted Wakokubon related to the text of Syojyu senkai with the same korean classical book related to the text of Taizen.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論

キーワード：和刻本　朝鮮本　韓本　漢籍

１．研究開始当初の背景

本邦中世末期から近世初期における東アジアの漢籍流通という問題意識を持ちつつ、具体的なテーマとしては和刻本と朝鮮版漢籍（朝鮮本、韓本）との関係を中心とする日朝文化交渉に焦点を絞った。なにゆえこうしたテーマ設定を行ったかといえば、上記の時期に朝鮮半島から日本への漢籍流入が顕著に見受けられるという事実が存するからである。すなわち、明代の嘉靖・万暦期（1522～1619）の、中国における出版事業の隆盛という現象を承けて、朝鮮半島にも大量の漢籍が輸入され、そのうちの多くが朝鮮国内において覆刻、あるいは改刻され、それら朝鮮版漢籍が日本に舶載されたという事実が背景に存するのである。こうした流通の様相を探ることを企図して、本研究はスタートした。

２．研究の目的

明代の中国で刊行された書籍が、直接日本に舶載される経路とは別に、朝鮮半島経由で輸入されるという経路があったことを、具体的に和刻本と朝鮮版漢籍との関連を調査することで証明したいと考えた。すなわち、

明刊本　→　朝鮮版漢籍　→　和刻本

という出版の流れが存在したであろうことを、実際の書籍に照らして明らかにすること、そして漢籍が日本に流入して来るブック・ロードの一つに朝鮮半島経由のルートがあり、文化交渉の一径路として日本の文芸思潮に少なからぬ影響を与えた事実を解き明かすことが、本研究の目的であった。

３．研究の方法

上記の目的を達成するために、先ず以下の漢籍に絞って調査を行うことに決した。

①　世説新語補
②　剪燈新話
③　古文真宝前集・後集

これらの漢籍に関して、明刊本、朝鮮版、和刻本の諸本を整理し、比較・検討する作業を行った。そのため、国内外の図書館おいて調査を行い、日本では主に内閣文庫、国会図書館、天理図書館等に所蔵される朝鮮刊本の写真複写を入手した。国外ではオランダのライデン大学東アジア図書館、台湾の台湾大学図書館において実地調査を行い、ライデン大学ではロバート・ファン・フーリックの旧蔵書中の和刻本を中心に調査を行い、台湾大学では久保天随旧蔵書の漢籍・和刻本を中心に調査を行った。なお、ライデン大学での調査に関しては、〔学会発表〕の②に記した発表において、調査結果の概要を述べた。

また、入手が可能な書籍については、研究室に備えることとし、①については和刻本（元禄七年刊本）、②については和刻本（慶安元年刊本）及び朝鮮版２種、③については和刻本３種及び朝鮮版１種を準備した。

４．研究成果

３で記した、①～③の漢籍について調査したことの概要を以下に記しておく。

①　世説新語補

『世説新語』は、南朝宋の劉義慶の著作であり、これに梁の劉孝標の注釈が施されたテキストが世に通行する。明代になって、後七子の一人として名高い文章家王世貞（1526-1590）は『世説新語』を愛読したが、同書が晋に終わって、これ以降の六朝の諸士の挿話を載せないことを残念に思う気持ちがあった。それゆえ明の何良俊『語林』が『世説新語』を模倣しつつ元代までの人士の挿話を収めることを知って、これと『世説新語』とを取り合わせて一書とすることを思い立ったのである。その際に編名は『世説新語』のそれを用いて各挿話を類別し、『世説新語』から二割の挿話を除き、『語林』より三割の挿話を採用するという編集方針をとった。こうして『世説新語補』は完成したのであり、その時期は序文の年紀にある嘉靖三五年（1556）頃であったものと考えられる。この『世説新語補』が編集されて四半世紀餘の時間が経過し、これにさらなる後修が加えられる。

王世貞の弟、王世懋（1536-1588）は蔵書二万巻を誇る蔵書家として知られたが、彼の友人張仲立（名は文柱）が兄世貞の編集した『世説新語補』の『語林』部分に注釈や校訂を施したことを知った。『世説新語補』は王世貞が編集した後に散佚したが、この張文柱の校注作業を経て、再び世に出ることとなったのである。折しも福建へと旅立たんとしていた王世懋に張文柱は、校注を終えた『世説新語補』の稿を手渡して序文を乞い、王世懋は自らが校訂して刊行した『世説新語』善本を張文柱に提供し、さらなる校勘作業に資する具として用いんことを願ったのである。以上を時系列的に記せば、以下の通りである。

○嘉靖三五年（1556）六月、王世貞が何良俊『語林』を用いて『世説新語』を増補し、『世説新語補』を編集する。同書はこの後、散佚。

○万暦八年（1580）秋、王世懋が豫章において自ら校訂した『世説新語』を刊行。

○万暦十三年（1585）春、王世懋の友人張文柱が『世説新語補』を入手し、これに校訂を加え施注を行う。その作業が終了し、乞われて王世懋が序文を書く。併せて王世懋は呉郡において刊行した改刻版『世説新語』を張文柱に提供する。

○万暦十四年（1586）秋、『世説新語補』が福建で刊行されるに際し、王世懋の知友陳文燭が序文を書く。

なお、『世説新語補』の多くのテキスト巻頭には「李贄批点」とある。しかしながら、この点に言及した序跋や附記は『世説新語補』には見受けられない。ただし、巻頭題に「李卓吾批点世説新語」と記すテキストも存し、同書の成立に李卓吾が関わったことを銘打っているのである。また実際に本文の鼇頭には「李云～」として批評も施されている。しかし、これは明代の嘉暦年間の通俗小説等に多く見られる、著名な文学者の名に仮託するものと解すべきであって、実際に李卓吾が成立に関わったか否かは定かではない。

こうして成立した『世説新語補』は、すみやかに朝鮮半島にもたらされ、朝鮮版本が刊行された。現在、知られる朝鮮版本には20巻10行18字系統のテキストがあり、今回は天理図書館今西文庫所蔵の版本を主に調査した。作業としては、このテキストと和刻本（元禄七年刊）とを比較・対照する作業を行った。その過程で、明刊本（万暦十三年序刊。天理図書館所蔵）とも比較・対照した。その結果、和刻本が朝鮮刊本に拠ったと判断するほどの徴証は得られず、かえって明刊本に類似するところが少なくないことがわかった。この点、今後本文のみならず注釈の内容や字句の異同までも精査し、検討してゆかねばならない問題であることを再確認した。

② 剪燈新話

本書は、作者瞿祐（1347-1427）の歿後、成化年間（1465-1487）初期には重校本として刊行され、こうしたテキストが朝鮮半島にもたらされたものと考えられる。本書をいち早く読了した金時習が、その模倣作『金鰲新話』を執筆したのは、この成化年間初期であったことは、よく知られた事実である。

この通俗小説『剪燈新話』に施注しようとする動きが、1500年代の半ばには見受けられる。林芑（垂胡子）が行った注釈がそれであり、この林氏の注釈は後に尹春年（滄洲）による訂正を経て『剪燈新話句解』というテキストとして成立することになる。尹春年は、前記『金鰲新話』の唯一の刊本として知られる中国の大連図書館所蔵本の刊行者としても知られ、『剪燈新話句解』成立をめぐって重要な役割を果たした人物である。

この『剪燈新話句解』が日本にもたらされたのが何時であるか定かではないが、慶長～元和間（1596-1623）には古活字本が刊行されている。この後、慶安元年（1648）に和刻本が刊行され、この後の『剪燈新話』流行の端緒を開くことになった。

この和刻本に関しては、早くに野口一雄氏の研究が備わり（「剪燈新話句解の諸本」1986 年）、同氏は本テキストを、正文は明刊本に拠り、注文は朝鮮本から採って一本にしたものと結論するが、本研究ではこの点を朝鮮版の諸本との対照によって修正できるのではないかと考えた。しかしながら、朝鮮版本は当初考えていた以上に多様であり、藤本幸夫氏の『日本現存朝鮮本研究　集部』（2006）に輯載する以下の主たるテキストの他にも異版が存することがわかった。

A．2巻20行11字系統のテキスト（内閣文庫所蔵林羅山旧蔵本、蓬左文庫所蔵本等）
B．2巻11行20字系統のテキスト（天理図書館所蔵本、慶応大学図書館所蔵本、東京大学東洋文化研究所所蔵本等）
C．2巻12行20字系統のテキスト（東京大学図書館所蔵本）

上記系統の他に今回の研究で披見したテキストには以下の二種がある。

D．2巻12行18字系統のテキスト（長尾研究室所蔵）
E．2巻11行21字系統のテキスト（同上。巻下を欠く零本）

以上、D・Eのテキストはいずれも李氏朝鮮時代の刊行であることに疑いは容れないが、刊年や刊行の経緯に関しては未詳である。また、この他にも 10 行 18 字（粛宗三十年 1704 刊）系統、10 行 20 字系統、11 行 19 字系統、11 行 20 字系統など多様な版本が韓国内の図書館に現存することが、閔寛東氏によって報告されている（『中国古典小説在韓国之伝播』1998）。

このように朝鮮版の全貌を知ることは困難であり、今回の研究においてこれら全てを精査することも不可能であった。ゆえに慶安元年刊の和刻本との関係も明らかにすることはできなかった。今後も『剪燈新話句解』の朝鮮版を引き続き調査し、和刻本との関係を探るつもりである。

③ 古文真宝前集・後集

『古文真宝』は、元の黄堅が編集した詩文の総集であり、前集十巻、後集十巻から成る。これに注釈を施したテキストが作られ、そのうち世に流布したのは元の人林楨の手になるものである。この系統のテキストで最も早期に属するものは、『魁本大字諸儒箋解古文真宝』（至正二十六年 1366 序刊）と題するものである。日本の南北朝期に同系統の元刊本を覆刻した版本が刊行され、現在も複数の図書館に所蔵される。

この他にも林楨の注釈を施したテキストとしては、『諸儒箋解古文真宝』『京板新増註釈古文大全』などの明刊本があるが、朝鮮半島においては、別の系統の『古文真宝』が流布した。『詳説古文真宝大全』がそれである。巻首には宋伯貞が音釈を施し、劉剡が校正したとあるが、両者ともに詳伝は不明である。

江戸時代の日本において流布した『諸儒箋解古文真宝』系統のテキストと輯録作品数を比べると、『詳説古文真宝大全』は前集で二十七篇、後集で六十三篇を増加させており、合計九十篇もの作品が加わっていることが確認できる。前集においては李白や杜甫の詩歌を足し、後集においては韓愈、柳宗元、蘇軾等の唐宋の名文家の代表的な作品を増している。このように『詳説古文真宝大全』は、林楨の注釈を有する『魁本大字諸儒箋解古文真宝』『諸儒箋解古文真宝』系統のテキストとは明らかに異なるものである。

この『詳説古文真宝大全』版本としては、庚子字を用いて世宗三十二年（景泰元、1450）に刊行されたテキストが初印とされる。この他にも、成宗三年（成化8、1472）、明宗二十二年（隆慶元、1567）、光海君四年（万暦40、1612）等が知られる。今回の調査では、上記『詳説古文真宝大全』の万暦四十年跋刊本をもとにし、日本の和刻本との比較・対照を行ったが、江戸時代に刊行された和刻本の種類は殊の外多く、網羅的に調査することはかなわなかった。よって、本書についても今後の継続研究課題としたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3 件）

① 長尾直茂、日本漢文学研究を志す外国人研究者のための文献案内・「中世」篇〔未定稿〕、上智大学国文学科紀要、査読無、29 号、2012、144-156
② 長尾直茂、宇都宮遯庵小伝、斯文、依頼論文、査読無、121、2012、1-12
③ 長尾直茂、中世禅林における『新刊全相平話前漢書続集』の受容―清家文庫所蔵『漢書抄』への引用をめぐって―、漢文学 解釋與研究、査読有、12 輯、2011、33-69

〔学会発表〕（計　3 件）

① 長尾直茂、中世における中国通俗小説受容について、中国古典小説研究会、2013 年 9 月 3 日、京都
② 長尾直茂、ライデン大学東アジア図書館所蔵のフーリック・コレクションについて、上智大学国文学会、2013 年 1 月 12 日、上智大学
③ 長尾直茂, The Use of Chinese Popular Novels in Commentaries(Shōmono) of the HAN SHU, European Association for Japanese Studies, 2011 年 8 月 26 日, タリン大学, エストニア

〔図書〕（計　4 件）

① 井上泰至、長尾直茂、鄭炳説編、勉誠出版、日中韓の武将伝（アジア遊学 173）2014 年、84-98
② 中野三敏、楠元六男編、長尾直茂他、竹林舎、江戸の漢文脈文化、2012 年、39-67
③ 瀬間正之、西澤美仁、長尾直茂他、上智大学国文学科、日本文学・日本語学・日本漢文学研究を志す外国人研究者のための文献案内、2011、109-146
④ 戸川芳郎、大島晃、町泉寿郎監修、長尾直茂他、汲古書院、大学聴塵（清原宣賢漢籍抄翻印叢刊Ⅰ、2011 年、450

６．研究組織

(1)研究代表者

長尾直茂（NAGAO, Naoshige）
上智大学・文学部・教授
研究者番号：22520370